

遺跡調査の社会学

——漫画と考古学——

櫻井 準也

Sociology of Archaeological Site Survey :

Archaeology in Japanese Comics

SAKURAI, Junya

Abstract

In popular culture, such as movie and anime, archaeologist appears in many works for many years, and they are college professors and adventurers. On the other hand, the investigator and worker of archaeological site survey came to be drawn as a main character in Japanese comics from the second half of the 1990s in Japan. It is the reason that the number of urgent archaeological site excavation increased under the influence of bubble economy, and archaeological site excavation serves as a familiar existence in Japan. These comics were drawn from site excavation worker's viewpoint, and these works can be regarded as precious data which can know the actual condition of the archaeological site excavation which is not recorded from conventional archaeological standpoint.

要約

映画やアニメなどのポピュラー・カルチャー（大衆文化）には古くから考古学者が登場する作品は多いが、彼らは大学教授や冒険家である。これに対し、わが国では1990年代後半より漫画作品の中で遺跡調査の調査員や作業員が主人公として描かれるようになった。その背景に、バブル景気の影響で緊急発掘調査件数が増え、わが国で発掘調査が身近な存在となったことがあると考えられる。これらの漫画作品は発掘作業員の視点から発掘調査が描かれたものであり、従来の考古学では記録されないわが国の発掘調査の実態を知ることができる貴重な資料として捉えることができる。

キーワード

遺跡調査の社会学 (Sociology of Archaeological Site Survey)

遺跡調査員・作業員 (Site Survey Investigator and Worker)

漫 画 (Japanese Comics)
ポピュラー・カルチャー (Popular Culture)

はじめに

一般的に考古学というと発掘調査がイメージされることが多い。ただし、地面を掘り返す発掘調査は考古学の分野だけでなく、恐竜などを発掘する古生物学でも発掘調査が実施されるため、両者が混同されることもしばしばである。また、このような誤解を助長してきたのが映画やアニメなどのポピュラー・カルチャー（大衆文化）の一部の作品群であり、実際に古生物学者だけでなく人類学者や言語学者も考古学者として映画やアニメに登場する。

このようなポピュラー・カルチャー（大衆文化）の視点から考古学を捉えようとする研究は、今世紀になって盛んになってきた（Russell (ed.) 2002、Holtorf 2005・2007、岡田2006、大津2006・2009・2010・2011・2014、下垣2010、ニコル2012）。また、筆者も映画・テレビドラマ・アニメ作品に登場する考古学者像について分析する機会があった（櫻井2014）。その結果、初期の外国の映画作品ではホラーやSFに考古学者が登場することが多かったが、1980年代の映画「インディ・ジョーンズ」シリーズの登場によってアドベンチャー作品に考古学者が登場するようになったことがわかった。これに対し、わが国では考古学者が登場する映画作品はそれほど多くなく、テレビドラマ作品で1980年代以降にサスペンスドラマ、1990年代以降に探偵ドラマに考古学者が登場する傾向がみられた。また、アニメ作品では初期にはSFアニメやロボットアニメに登場し、1980年代になると考古学者が登場する作品のジャンルが増えている。このようにポピュラー・カルチャー（大衆文化）に登場する考古学者は実際の考古学者とは異なるイメージで捉えられているが、フィクションの世界で考古学者は確実に現代社会に根付いているのである。

また、これら多くの作品の中で遺跡の発掘現場が登場する。それらは実際の発掘現場でロケを実施した作品、洞窟や地下壕などでロケを実施した作品、発掘現場を再現した作品など様々であるが、実際の発掘現場でロケをする場合は現場の作業員がエキストラとして参加している作品が多い。なお、わが国の発掘調査は通常、調査全体を指導する調査団長、発掘現場を運営し、具体的な指示を出す調査員（そのトップは主任調査員あるいは調査主任である）、調査員に代わって作業員に指示を出し、図面作成や写真撮影を行う調査補助員、発掘作業にあたる作業員に区別できるが、発掘調査に従事する人々のほとんどが発掘作業員である。そして、実際の発掘現場がどのようなものであるか知るためには、発掘作業員によるエッセイである『わく沸くどき土器』（伊藤2004）や『東京発掘物語』（里山2009）などを参考にすることができるが、わが国の発掘現場の様子やそこで働く人々の生態を知ることができる漫画作品も存在する。特に漫画作品の場合は画で表現されるためわかりやすく、中途半端な表現ができないため作者自身の実体験や詳細にわたる取材によるリアルな発掘現場が描かれており、発掘現場の実態や発掘現場の人々の生態を知ることができる。

1. 描かれた発掘現場

わが国の漫画作品には、以前から遺跡や発掘現場が描かれることはあったが、調査員や作業員として発掘調査に従事する人々が主人公の作品は存在しなかった。しかし、1990年代後半になると発掘調査員や作業員が主人公の作品が登場してくる。

1.1. 『大恋愛』(図1)

もりたじゅん氏の『大恋愛』は、1997年に雑誌『YOU』No.9・11号に掲載され、1999年に集英社より単行本が刊行された。作者のもりた氏は、広島県出身で1960年代末から少女漫画やレディースコミックを手がけている。夫は漫画家の本宮ひろ志氏である。デビュー作は1968年に第一回ぼん新人漫画賞で入賞した『マイ・エンゼル』であり、代表作として『キャー!先生』『うみどり』『ニシンとシシャモ』などがある。本作品の裏表紙には「離婚が原因で恋に臆病になっていた杉下泰子。ある日、仕事先の遺跡発掘現場の責任者・向坂に言い寄られ—逆境にめげない女たちのパワフル・ラブ・ストーリー『大恋愛』……」とある。

主な登場人物は、杉下泰子、山川萌、山川慎一、向坂所長の4名である。このうち主人公の杉下泰子は28歳、夫の家庭内暴力



図1 『大恋愛』(もりた1999)

で離婚歴のある民間発掘業者の発掘調査員で時給千円にひかれて発掘をはじめて3年になる。山川萌は68歳で夫に先立たれ、姪の泰子に誘われて発掘に参加している。山川慎一は70歳の作業員で「おば—さま方」のアイドルである。向坂は発掘現場の所長で泰子の上司にあたるが、資格をもった調査員になるために論文を書いている(資格をもった調査員とは発掘調査を担当できる日本考古学協会員を指しており、協会員になるために業績審査がある)。物語では泰子が向坂に、萌絵が慎一に求婚され、最終的に二組の恋愛が成就するが、このような発掘現場での恋愛は珍しいことではなく、考古学研究者の多くが発掘現場で知り合った異性と結婚している。調査員同士の恋愛に興味深々の「おばちゃんたち」の姿も発掘現場ではありがちである。

また、作業員が記録をとらずに遺物を取り上げることを注意する場面、ビニールシートの色が管玉の色に似ていること、調理用の「おタマ」を発掘調査に使用することなど発掘現場の経験がないと表現できない部分も多い。さらに、土層断面図の実測方法や住居址の竈の構造などが詳しく説明されており、「スコップ・ジョレン・移植ゴテ」「ウンボ」「試掘」などの発掘現場用語も

使用されている。

この作品では発掘現場での恋愛事情が描かれているが、もりた氏は長年にわたって漫画作品で様々な人々の恋愛や人間模様を描いており、本作品も発掘現場という特殊な環境における恋愛を題材にしている。

1.2. 『遺跡の人』(図2)

次に、2008年に双葉社より刊行されたのがわたべ淳氏の『遺跡の人』である。本作品は、8章までが『漫画大衆』の2007年3月号から10月号に連載され、9・10章が描き下ろしとなっている。作者のわたべ氏は、石川県金沢市出身で代表作は『レモンエンジェル』『横浜ラブ・コネクション』『ライジング』などである。帯の表には「『本当』だから胸を打つ問題作 元売れっ子漫画家の哀愁バイト生活」、裏には「連載雑誌の休刊、大企業の「上」の事情、出版社の大量リストラの巻き添え……さまざまなことが重なり仕事を失った漫画家は、家にもいづらくなり、遺跡発掘のバイトを始める。ハードな肉体労働に、指は自力で開かなくなり、漫画のことなど考えられなくなってしまい、そんな中、妻との別居問題も浮上、それでもなんだか、「現場」には面白い人もたくさんいるし、発掘の仕事が楽しくもあり、このままのほうが楽なような、いやいや、オレは漫画家だ……な迷走の日々を透明感のある筆致で描く。掘り出したのは埋めておきたかった「自分」？ これは読むブルースだ！」とある。このように、主人公は作者自身である。雑誌が休刊になり仕事を失った漫画家が発掘調査の作業員を経験する物語であり、遺跡調査の実態が実際の発掘作業員の視点から描かれている。



図2 『遺跡の人』(わたべ2008)

主人公が発掘作業員（アルバイト）として働いていた発掘現場は実在の東京郊外のM大学グラウンド跡の発掘現場（後期旧石器時代の遺跡）や都区内のT大の発掘現場（江戸時代の大名屋敷）である。ここでは発掘作業員（『遺跡の人』）が発掘作業を請け負う建設会社に雇用されており、「元店長、元カメラマン、職人、俳優、バンドマン、そしてマンガ家」とあるように発掘作業員は様々な職業に従事していた人々の集まりであり、彼らは様々な悩みを抱えた「心のホームレス」と表現されている。また、作品の中で過労で倒れ熱中症になりかけたり、雨の中での作業を強いられるなど発掘作業員の過酷な姿が描かれている。また、発掘道具にこだわり、試掘坑（ピット）の壁をきれいに仕上げようとする作業員の姿など発掘作業員の生態も描かれている。

これに対し、調査を指示する調査員が登場する機会は少なく、登場するのは拡声器で作業員に

遺跡の説明をするM大の調査員とT大の調査員のみであるが、T大のO氏（実在の人物）は個人的に遺跡の説明をしてくれる親切な調査員として描かれている。このように、調査員が登場するシーンが少ない点については、1990年代頃から首都圏で行政や発掘調査団などによる直接雇用ではなく建設会社を通じて作業員が雇用されるようになり、調査員と発掘作業員の関係が希薄になったことが関連していると思われる。

具体的な発掘作業の描写では、関東ローム層の効率的な掘り方や土層断面図の取り方などがわかりやすく説明されている。また、T大の江戸時代の大名屋敷の調査方法とM大の旧石器時代の調査方法がまったく異なるものであることやM大の遺跡でいくら掘っても遺物が出土しない際の会話の中に2000年に発覚した「前期・中期旧石器時代遺跡捏造事件」が引き合いに出されている点も興味深い。さらに、「ピット」「イショク」「イモ石」「エンピ」「ワンスコ」「半スコ」「ベルコン」「ネコ山」「タテジョレン」「カクラン」など発掘調査に従事した人でないとわからない専門用語も多く登場している。

作者は発掘現場で働く作業員がいかに世間から隔絶された存在であるか切々と語っているが、何人かの発掘作業員（「遺跡の人」）は発掘現場から抜け出して本来の分野で活躍していることや作者が漫画家に復帰したあと「戦友」であるかつての仲間と連絡を取り合う様子も描かれている。そして漫画家に戻った作者がM大学の校舎が建設された現場を再び訪れ、当時は懐かしむシーンで作品は終了している。

1.3. 『メッシュ!!』(図3)

これに対し、作品の舞台が大学の考古学研究室であり、主人公が考古学の専攻生であるため発掘現場が頻繁に登場する作品に小野氏の『メッシュ!!』がある。この作品は、雑誌『Kiss PLUS』の2009年5～11月号、2010年1・3～11月号に掲載され、2010年に講談社より単行本が刊行された。作者の小野氏は、奈良県出身で2006年に漫画家としてデビューしている。代表作として『ホームスイートホーム』がある。奈良にある大学のモデルとなったのは文化財学科のあるN大学であり、三輪ゼミの三輪教授はS・R氏、一条ゼミの一条教授はS・Y氏という実在の大学教授（考古学者）がモデルとなっている。

次に、本作品の内容であるが、裏表紙には「超引っ込み思案の初瀬一花は、大好きな仏像や寺院の勉強をするため、生まれ育った島を離れ、ひとり奈良の大学へ！そこで出会った考古学オタク男子・春日に



図3 『メッシュ!!』(小野2010)

『当たり屋』の才能を見込まれたことから一花の運命が動き出す……!? 仏像ガール必読の書、解禁!」(第1巻)、「メッシュ(ふるい)のように大事なものを取りこぼさない人間になりたい」という考古学オタク・春日の影響で考古学に興味を持ち始めた仏像大好き女子の一花。春日とちょっとイイ感じ♡になったのも束の間、留学先から春日の元カノが帰国してきて……!?」(第2巻)とあるように、先輩の春日修二への恋心、春日の元カノの登場で揺れる乙女心、親友の斑鳩涼との友情などを通して主人公の初瀬一花が成長する姿が描かれた作品である。

主人公の一花は、いわゆる「仏像ガール」で奈良にある大学に進学するが、そこで入学式当日から三輪ゼミの春日に誘われて発掘現場に送り込まれてしまう。そこでいきなり弥生土器を掘り出して「当たり屋」と呼ばれ、次第に考古学の世界に引き込まれていく。美術史志望であった一花は考古学の三輪ゼミに所属するが、卒論のテーマは「仏像考古学」である。そして、卒業後大学院に進学し、大学院修了後も奈良で発掘調査に従事することになる。

指導教授の三輪教授は変人ではあるが、魅力的な学者として描かれており、図書に囲まれたゼミの研究室は、いかにも考古学の教授の研究室らしい。また、遺物が並んでいる考古学実習室は様々な作業をする場であるが、宴会で酔いつぶれて朝まで寝ている学生がいるあたりもいかにも考古学の研究室らしい。また、発掘現場や実習室の記述では、年代測定の方法、遺構のレベリング、遺物の洗浄・拓本・修復の方法などが解説されており、発掘現場では「やり方測量」「水糸」「野帳(レベル)」「ネーミング(注記)」「基壇」「瓦溜り」などの専門用語が登場している(発掘用具の種類や呼称は東日本のものと若干異なり、地域性が感じられる)。さらに、新入生が発掘調査でインディ・ジョーンズの映画を例にあげると「ナイナイナイ絶っ対ナイから」と先輩たちから否定され、一花が考古学専攻生の卒業後の進路について尋ねると「一瞬空気がよどむ」あたりはリアルな表現である。このように、本作品では徹底した取材のもとに考古学を専攻する現代の大学生の姿が生き生きと描かれている。

なお、「実験考古学ゼミ」という実際にはありえない設定ではあるが、同様に大学の考古学研究室が舞台となっている作品に、いとうれいこ氏の『オレンジ☆シップ 諸平野大学実験考古学ゼミノート』がある(いとう2010)。

2. 主人公になった発掘調査員・作業員

以上紹介したように、1990年代後半になるとわが国の漫画作品の中に大学で教鞭をとる教授や高名な考古学者ではなく遺跡の発掘調査員や作業員が主人公となった作品が登場するようになる。同様の傾向は1990年代後半以降の映画作品の中にもみられ、発掘調査に従事する若い調査員が主人公となっている作品が登場している(櫻井20014)。その一つが、ネパール人と発掘調査員のふれあいを描いた高岡 茂監督の『ベイビークリシュナ』(1998年公開、スタジオ・デルタ)である。主人公は佐々木誠(加藤賢崇)で40代独身の大学の発掘助手である。映画に登場する発掘現場は遺跡を再現したものであるが、会話中の学術的な内容(継体天皇と大阪府今城塚古墳の関係など)や「トレンチ」などの専門用語の使用、現地説明会の様子、遺跡が見つかり困惑する工事関係者、きびしい発掘調査日程のため過労で倒れる調査員など、わが国の発掘調査の実態が描かれている。その後の映画作品では、深川栄洋監督の『非女子図鑑 B(ビー)』(2009年公開、

ニューシネマワークショップ)がある。ここでは主人公の菅山美帆(月船さらら)が発掘調査の調査主任、大和圭吾(田中幸太郎)が調査員である。『非女子図鑑』は女子らしくという言葉からはみ出た、わが道を行く女子たちを描いた短編映画集であり、『B(ビー)』では男社会である発掘現場で逞しく生きる女性の姿が描かれている。また、撮影場所となった遺跡は実際の発掘現場であり、発掘作業員がエキストラとして出演している。

このように、1990年代後半以降、漫画や映画の世界で発掘調査員や作業員が物語の中心となる作品が登場するようになってきている。その理由としては、1980年代後半頃からバブル経済の好景気にも支えられて遺跡の緊急発掘調査件数が増加し(1996年にピークに達している)、その結果発掘に従事する人々が急激に増え、わが国で発掘調査が身近な存在になったことがあげられる(図4)。また、首都圏を中心に緊急発掘調査が従来のように行政主体ではなく、民間の発掘会社によって実施されるようになってきたのもこの時期である。このように、わが国で実施される発掘調査はその当時の景気や社会状況を反映する。

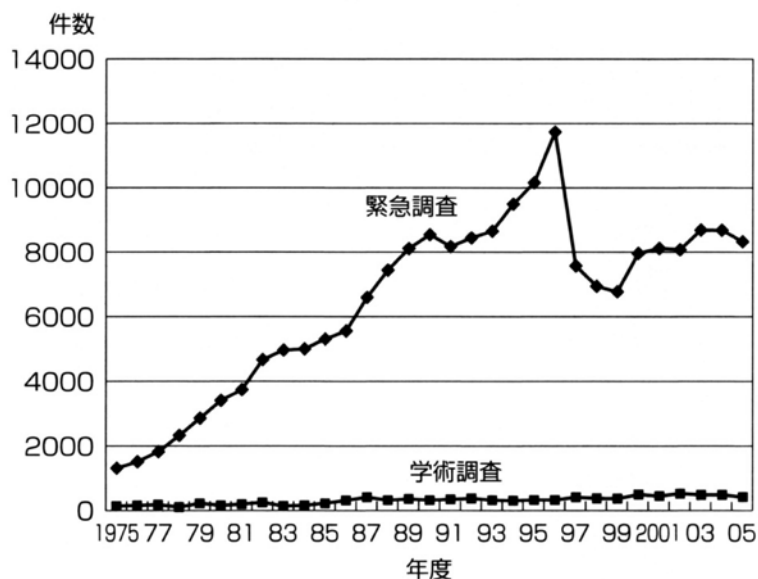


図4 わが国の発掘調査件数(佐々木ほか2011)

おわりに

遺跡の発掘調査員は、日々遺跡と格闘しながら調査にあたり、発掘調査終了後は遺物整理作業を実施して最終的に発掘調査報告書を作成する(最近では発掘調査と遺物整理作業の分業化が進んでいる)。発掘調査報告書はあくまで学術的な目的で作成されるものであり、今回紹介した漫画作品のように発掘現場の日常やそこで働く人々にスポットライトが当たることはない。しかし、地域や調査主体によって異なる発掘調査の方法や様々な経歴や人生を背負った発掘作業員の姿に注目する「遺跡調査の社会学」という視点も必要であり、今回紹介した漫画作品のように発掘作業員の視点から描かれた作品群はその基礎資料として位置づけることができる。その意味で

ポピュラー・カルチャー（大衆文化）は大衆によって消費されるだけではなく、これらの作品群のように発掘現場という特殊な世界における日常生活を記録したドキュメントとしての側面も持っているのである。

引用・参考文献

- 伊藤啓子『わく沸くどき土器 私は遺跡発掘作業員』青娥書房、2004年
- いとうれいこ『オレンジ☆シップ 諸平野大学実験考古学ゼミノート』講談社、2010年
- 大津忠彦「古代西アジアの土器とロビンソン・クルーソーのうつわ」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第1号、2006年
- 大津忠彦「小説『内海の輪』に読む考古学」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第4号、2009年
- 大津忠彦「野上弥生子著『真知子』における考古学像とその背景」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第5号、2010年
- 大津忠彦「西アジア考古資料と近代日本文学」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第6号、2011年
- 大津忠彦「松本清張著『鴉外の婢』にみられる考古学的虚実構成」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第9号、2014年
- 岡田知子「日本のマンガに見るカンボジア」上田広美・岡田知子（編著）『カンボジアを知るための60章』明石書店、2006年
- 小野直美『メッシュ!!』講談社、2010年
- 櫻井準也『考古学とポピュラー・カルチャー』同成社、2014年
- 櫻井準也「考古学とポピュラー音楽—考古学と大衆文化をめぐる新たな動向—」『湘南考古学同好会会報』140号（35周年記念号）、（印刷中）
- 佐々木憲一ほか『はじめて学ぶ考古学』有斐閣、2011年
- 里山春樹『東京発掘物語』講談社、2009年
- 下垣仁志「フィクションの考古学者」『遠古登攀』遠山昭登君追悼考古学論集遠古登攀刊行会、2010年
- ニコル・ターリッジ・ルーマニエル「現代の土偶現象」『土偶・コスモス』羽鳥書店、2012年
- 松田陽・岡村勝行『入門パブリック・アーケオロジー』同成社、2012年
- もりたじゅん『大恋愛』集英社、1999年
- わたべ淳『遺跡の人』双葉社、2008年
- Holtorf, C. 2005 *From Stonehenge to Las Vegas : Archaeology as Popular Culture*. ALTAMILA.
- Holtorf, C. 2007 *Archaeology is a Brand : the Meaning of Archaeology in Contemporary Popular Culture*. Left Coast Press.
- Russell, M. (ed.) 2002 *Digging Holes in Popular Culture—Archaeology and Science Fiction*. Oxbow Books.